



「日本爬虫両棲類学会 第 48 回大会」が天理大学で開催

佐藤孝則

本年 11 月 7、8 日の両日、天理大学で「日本爬虫両棲類学会 第 48 回全国大会」が開催された。この大会が奈良県内で開かれたのは初めてで、一般市民を対象にした公開講演会が大会期間中に開催されたのも、学会としては初めての試みだった。

7 日(土)の午前、(財)自然環境研究センターの千石正一研究主幹による「世界の爬虫類」と題した公開講演会がおこなわれ、250 名ほどの聴衆は千石氏の絶妙な話術と美しいスライドにすっかり引き込まれ、「千石ワールド」を心ゆくまで楽しんだ。襲われて死んだふりをする滑稽な毒ヘビ、ネズミに砂をかけられる気弱なヘビ、木から木へと滑空を楽しむブルネイ産のヘビ、あるいはただひたすらにらみ続けるトカゲなどなど、おもしろおかしい映像と解説はテレビで見ると同じだった。



千石氏の講演の前には、学会会長で京都大学大学院教授の松井正文氏と、開催大学の橋本武人天理大学長の挨拶があり、橋本学長からは天理教の創世説話の「元の理」に爬虫類などの水域性動物が登場することなどが紹介された。

午後からはカメ、トカゲ、ヘビなどの爬虫類や、カエル、サンショウウオ、イモリなどの両生類についての研究発表が二つの会場に分かれておこなわれ、翌日の午後まで続いた。

なかでも、大会初日の午後、国立環境研究所の五箇公一氏による「カエルツボカビ・アジア起源説の検証(その 1) 日本におけるカエルツボカビの多様性」と題した研究発表がおこなわれ、研究者の注目を集めた。

中南米や豪州、アフリカで両生類を激減させているカエルツボカビ菌が日本では多くの近縁タイプが確認されているにもかかわらず、それが原因でカエルが大量に死んだという事例は野外の個体群からは報告されていない。このことから、日本のカエル類はカエルツボカビ菌と共進化し、菌に対する抵抗性をすでに獲得していると判断し、五箇氏は「カエルツボカビ症の起源は日本、もしくはアジア圏ではないか」という新仮説を提唱した。ほかにも、多くの最新研究結果が報告された。

2009 年版「レッドリスト」で絶滅危惧種に指定されたタンザニアの溪谷に生息するキハンシヒキガエルは、カエルツボカビ症で野生種は絶滅したと評価された。このように今日もなお、15 分に 1 種の割合で生物種が絶滅している状況を考えると、野生生物の絶滅対策は緊急性を要しているといえる。

生物がいつ、どこで、何が原因で絶滅するかということは、研究者であっても予想することは難しい。だからこそ、普段から生物の生息状況を調べたり、自然の移り変わりに目を向け、耳を傾けたりすることが大切なのである。その役割を果たしているのが、爬虫両生類の分野であれば千石氏や五箇氏らの研究者である。

生物の絶滅を回避させるためにも、今回の学会での一般向け公開講演会は意味があり、千石氏のようなインタープリター(野生生物の代弁者、通訳者)による講演は、むしろ大きな意義を持っていたと思われる。

日本生命倫理学会第 21 回年次大会

堀内みどり

標記大会が、「バイオエシックスを未来に! —「生と死」を考える市民と運動—」を統一テーマとして、11 月 14、15 日の日程で東洋英和女学院大学にて開催された。14 日には、本研究所もオブザーバー会員である教団付置研究所懇話会の生命倫理研究部会が、公募シンポジウムに参加した。テーマは「自死と宗教—教義と理念、そして実践へ—」とし、自死をどう捉え、自死遺族に宗教者がどのように対応するのかを視野に入れた発表となった。オーガナイザーは浄土真宗本願寺派教学伝道研究センターの藤丸智雄氏、司会は玉光神社権宮司の本山一博氏。シンポジストは次の 3 名であった。

- ・ 土井健司(日本キリスト教協議会):「自死という問題とキリスト教」
- ・ 堀内みどり(天理大学おやさと研究所):「「出直し」に生きる」
- ・ 藤丸智雄(浄土真宗本願寺派教学伝道研究センター):「実践へと開く仏教教義—自死問題から—」

大阪希望館支援集会

金子 昭

標記集会が 11 月 28 日にカトリック大阪カテドラル聖マリア大聖堂(玉造教会)で開催された。テーマは「『思いやりのまち』大阪を創ろう!! 市民フォーラム」であり、パネルディスカッションの総括コメンテーターとして金子昭が参加した。大阪希望館とは、派遣切りやリストラなどで仕事や住まいを失った人や、社会的困難を背負って支援がなければ野宿生活に陥らざるをえない人々を主な対象として、相談機関や支援のための居宅等を備えた施設。今回の集会は、超宗派による釜ヶ崎のホームレス支援グループ「野宿者問題を考える宗教者連絡会(Soul in 釜ヶ崎、略称ソルカマ)」などが共催で開催された。

- 第 1 部 廣畑涙嘉牧師:トーク&ライブ「明日はきっと訪れる—『痛み』を抱えて生きているすべての若者たちへ」
- 第 2 部 「大阪希望館の現状紹介」
- 第 3 部 パネルセッション:「『思いやり』社会の実現へ向けて」
- ・ 鈴木友宏:「ひきこもり 30 年」脱出の経験から
  - ・ 近藤美登志(西成高校):「格差社会」の中の教育現場から
  - ・ 山口洋典(浄土宗應典院):「お寺と地域社会を結ぶ」視点から
  - ・ 金子 昭(天理大学おやさと研究所):総括コメント



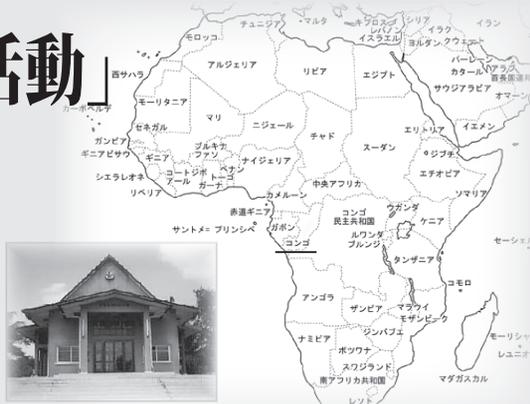
第 3 部パネルディスカッションの様子

## 第6回伝道フォーラム

# 「コンゴ伝道における諸活動」

コンゴ共和国では、1964年の教会設立と同時に開始された「憩の家」診療所の医療活動の他、柔道や日本語教室、また鼓笛隊といった活動が活発に行われてきました。現在では、それが教会が運営する託児所から幼稚園、小学校までの教育活動や読み書きができない人のための識字教室などに繋がっています。

そこで今回は、コンゴ伝道の上でこれまで展開されてきた医療や文化、スポーツ、教育などの諸活動に焦点を当て、海外伝道、とりわけ開発途上国と言われる地でのさまざまな布教伝道のあり方について考えていきます。



開催日時：平成22年2月26日（金）午後1時から

開催場所：天理大学研究棟3階第1会議室

### 講演者

谷 徹也：奥地での布教活動を通じて（ルカク布教所の生活から）

柳瀬由利子：看護師の体験を通じて（「憩の家」診療所の活動から）

森 洋明：子どもの育成のための活動を通じて（鼓笛、コーラス、学校運営等の活動から）

入場無料・来聴歓迎

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 天理大学 おやさと研究所  
FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

## — お 知 ら せ —

天理大学 おやさと研究所  
平成22年度公開教学講座

# 「現代社会と天理教」(1)

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思えます。

講座は、平成22年4月から11月まで(7月を除く)の毎月25日、午後1時から2時45分にかけて開講します。会場は、道友社6階ホールを予定しています。

多くの皆さまのご参加を、お待ちしております。

グローバル天理  
第11巻 第1号 (通巻121号)

2010(平成22)年1月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

発行者 井上昭夫  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

Printed in Japan